親の老いを見守る

長尾 和宏さんに聞く

自然な最期 最後の孝行

本人は困っていないのに子供たちがうろたえている

年をとり心身の機能が衰えた親をどう支えるかは、中高年世代共通の課題だ。「親の人生の穏やかな終末期や臨終を子供たちが邪魔している」。20年にわたる在宅診療で約1000人を看取った長尾和宏さん（58）はそう言い切る。老いた親とどう向き合えばいいのか、長尾さんの言葉にヒントを探った。

「担当する高齢患者の家族や親の介護の相談に訪れる方々の話には共通点があります。『親の体が衰えたり認知症になったりして困っている。医療や薬の力でなんとかしてほしい』というのです。本人はちっとも困っていないのに、子供たちがうろたえている、という構図です」

「今、高齢の親を持つのは戦後生まれの40～60歳代。平和な時代を生き、人の死を身近で見た経験が乏しい。死は自宅から医療機関に移り、1975年に両者の数が逆転。伝統的な看取りの文化に接することなく生きてきた人たちです。これに対して、親の世代は戦争でたくさんの死を目撃し、たまたま生き残った自分だっていつ死ぬかもしれないという覚悟ができています。無理な延命を望まない人が多いのもこのためでしょう」

「子供の側に十分な心構えができていないために混乱するケースもあります。ある70代の肺がん末期の男性は病院で死期が迫り、主治医は息子に今夜がヤマ、と告げました。すると息子は『父はいつも畳の上で死にたいと言っていたので、家に連れて帰りたい』と言い出します。主治医は帰宅を許し、在宅医療を行う私に連絡してきました」

「急きょ自宅に向かった私は看取りの心構えなどを家族に説明しました。息子は父の死を受け止めるのが怖くなり、『自分たちで看取るのは無理。やはり病院に』と言います。父親はわずか2時間の自宅滞在の後、病院に戻り、間もなく息を引き取りました。息子に振り回された父親がかわいそうでした」

「『家で死にたい』という父親の想いを聞いていたなら、早い段階から在宅医療を選択できたはずです。おそらく息子は父親の願いを聞き流し、本気で受け止めていなかったのでしょう。そのため父親の希望は叶えられず、息子も後悔する結末になりました。こうしたことにならないよう息子や娘は親が元気なうちに終末期をどうしたいのかについて話し合い、記録に残しておくことが必要です。特に、最期を迎えるのは自宅か病院か、人工呼吸や人工栄養などの延命治療を望むかどうかが大切です」

元気なうち希望聞く

認知症高齢者は、要らぬ我欲を手放した自由人

「子供にとって親は、ある時期まで強くて頼りになる存在です。親しみを持ち敬意を払う対象でもあります。親の老いを受け止められないのはこうした親像から離れられないのも一因でしょう」

「しかし、そんな親もいつかは老いていきます。元気いっぱいだった母親にがんが見つかり、物知りだった父親が認知症になる。子供は戸惑い、嘆きますが、今や2人に1人ががんになり、認知症も2人に1人がなる時代が間もなくやってきます。『当たり前』のことが親に起きているだけで、自分の親だけはそうならない、と考えるのは現実を直視しない独りよがりです」

「老いていく親を見るのは確かにつらいことです。体の機能が衰えて、以前できていたことができなくなり、あちこちの痛みを訴えたりもします。しかし、肉体的に健全であることが幸福だとは限りません。むしろ『あれができる、これもやりたい』と止めどもなく願望が広がり、息苦しい思いをするばかりです」

「本当に精神が自由になるのは、身体が思うように動かなくなったり認知機能が下がったりして、要らぬ我欲を手放してからではないでしょうか。認知症老人は子供から見れば不自由な人かもしれませんが、本人は社会のしがらみから抜け出して人生で初めて訪れたゆとりの時間を味わっているのかもしれません」

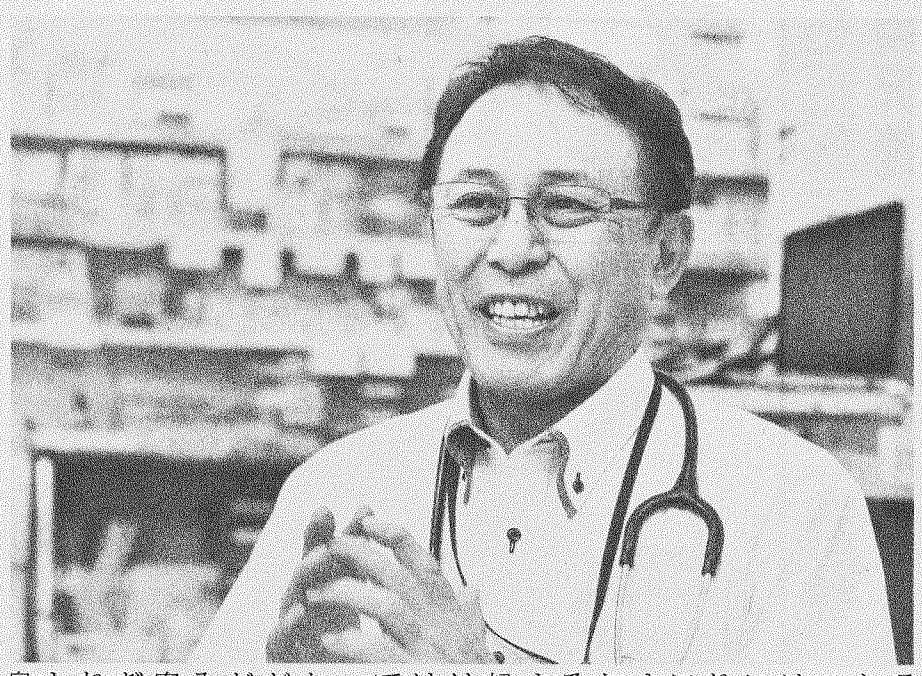
親の人生の最終章を明るく穏やかなものにできるかどうかは、家族の態度次第、と長尾さんは強調する。

「『認知症になってしまいかわいそう』『何もわからないなんて不幸だ』など大きなお世話。親から『あなた誰？』と聞かれても怒ってはいけません。『以前からあなたのファンの者ですが……』と笑顔で言葉を返しましょう」

「『まだらボケ』という言葉があります。病名でも医療用語でもないけれど、言い得て妙なところがあります。人の体調は気候の変化など様々なことに影響を受けます。我々は皆『まだら』なのです。認知症になると、体調や気分の善しあしや関節の痛みなどの変動が大きくなります。そこを分かって、上手に接する"子供の知恵"も必要です」

「心配するあまり、親の生活を必要以上に管理しがちですが、それでは、互いにストレスをためるだけ。親は老いた姿を通じて、命の仕舞い方を身をもって子供に教えてくれているのです。親の老いをおおらかに見守り、自然に任せる穏やかな最期を迎えられるようにすることこそ、子供ができる最後の親孝行ではないでしょうか」

（編集委員　木村彰）



ながお・かずひろ　1958年香川県生まれ。84年東京医科大卒業。95年兵庫県尼崎市に「長尾クリニック」を開業し、地域医療に従事。日本尊厳死協会副理事長、日本慢性期医療協会理事、日本ホスピス在宅ケア研究会理事などを務める。著書に「家族が選んだ『平穏死』」「『平穏死』10の条件」など。

療養は病院から地域・自宅へ

担い手の拡充 カギに

増大する医療・介護ニーズに対応するため、国は2000年代に入ると、病院の入院日数の短縮に乗り出し、12年には「施設中心の医療・介護」から高齢者の療養を地域や自宅に転換する「地域包括ケアシステム」の整備を政策目標に掲げた。医療、介護、予防、生活支援、住まいのサービスを包括的・継続的に提供して住み慣れた家や地域で暮らし、最期を迎えられるようにする。

在宅療養の高齢者を診療する長尾さん（兵庫県尼崎市）

カギを握るのは訪問医療や訪問介護の担い手となるマンパワーの拡充だ。国は06年、「在宅療養支援診療所」制度をつくった。自宅に医療を届けることで病院に行けない虚弱な高齢者を支えるのが狙い。長尾さんのクリニックも同年在宅療養支援診療所となり、年中無休・24時間体制で訪問診療をしている。内閣府の全国55歳以上の男女を対象にした12年の調査によると、「どこで最期を迎えたいか」との問いに、「自宅」が54.6%で最も多く、「在宅重視」は高齢者の意識にも沿っている。

ふるさと再訪

山口・萩 11

「古地図がそのまま使えるまち」が萩の城下町の売り物。だが、かつて賑わった商店街は空き店舗だらけ。アーケードを抜けた辺りから広がる城下町も無

島沢裕志（61）

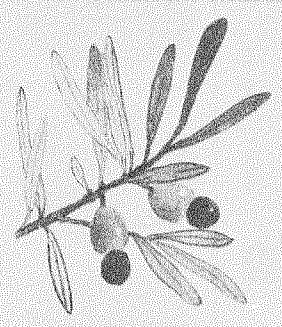
いは木戸孝允（桂小五郎）旧宅跡。岡田窯の新鋭作家、岡田泰さん（40）に特注した萩焼のカップでコーヒーを飲んでいる傍らには、店内で和服に着替え、観光に出かける女性グループやカップル、ちょんまげ頭に刀差しの侍に扮した男性の姿がある。ここを営むのがキモノレゾンデートル社長の関伸久さん（43）だ。

ゾンデートル（仏語で「存在価値」）を再認識した瞬間という。

卒業後は大手銀行に就職し、「多くの中堅・零細企業の社長に会って徹底的に経営を学びました」。そして「不況時こそ起業のチャンス」と考えた。上司も理解してくれた。2008年を土産用に開発。空港や道の駅、高速道路のサービスエリア、旅館などに販路を広げた。

本命の呉服は、婚礼では当たり前の「着物レンタル」。京都のようにリピーターが望めないへき地の城下町観光を、レンタル着物で楽しんでもらう「コト

うちたた寝



イヌマキ（犬槙）　マキ科常緑高木。暖地の山に生育。雌雄異株。球形の実の後方の花托は赤紫に熟す。高さ20メートルにも。

イラスト・平野　恵理子

は宝物

茨城県つくば市で建築事務所を経営する対馬英治さん（76）は、重厚な古民家を丁寧に解体し、建具や部材を新たな住宅に再利用してきた。都内で福祉関連の出版事業をしていたが、妻のぜんそくで1990年に転居。独特の構法の木造建築を研究者する専

壊されそうな貴重な家があると聞くと、出向いて調べ、再利用の当てもないのに解体し、保存してきた。「古い建築部材は適度に乾燥して耐久性もあり、新材と組み合わせて使えば独特の風情のある住宅ができる」と対馬さん。

3年前、相談を受けて調べた堺市の反正天皇陵近くにある和洋2棟からなる戦前の大邸宅も「壊してごみにしてしまうのは忍びない」建物だった。洋館の半円の窓や建具はつくば市に建てた洋風住宅に再利用。和館の部材などは今年奈良県明日香村に建てた瓦

日本経済新聞「こころページ」編集室、電子メールkokoro@nex.nikkei.co.jp

■ シニア記者がつくるこころのページ ■　（毎週土曜に掲載）